
桜の舞い散るこの庭で

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の舞い散るこの庭で

【Nコード】

N7470I

【作者名】

さら

【あらすじ】

14歳の春、私とママの暮らす家にやってきたのは、エッチな漫画を描いている新しいお父さんと、イケメンだけど意地悪な新しいお兄ちゃん。私、こんな人たちと一緒に暮らさなきゃいけないの？でも新しいお兄ちゃんのことがちよっぴり気になる私……そしてそんな新しい家族には、私の知らない秘密があった……

1 新しいお父さんがやってきた

庭の桜が満開になった14歳の春休み、私の家に新しいお父さんがやってきた。

「いやー、すごくステキな庭だねえ」

新しいお父さんは大きな荷物を玄関に置いて、私に向かって笑いかける。

ぼさぼさ頭に無精ひげをはやした、私の新しい『お父さん』……
「空センサー、センサーのお部屋はこっちですよー」

奥の部屋からエプロン姿の私のママが、満面の笑顔でお父さんを呼ぶ。

「おいおい、センサーって呼ぶのやめてくれよ」

「えー？でもセンサーはセンサーでしょ？」

ママはお父さんの腕を組み、奥の部屋へと消えていく。

「あれが私のお父さん？」

私はポツリとつぶやいた。

ママの再婚話が決まったのはつい2週間前のこと。

私が4歳の時にパパが死んでから10年、ママは何度もあった再婚話を断り続け、女手一つで私をここまで育ててくれた。

そんなママが突然、新しいお父さんの写真を持ってきて私に見せたんだ。

「この人と結婚したいんだけど」

私はじつとその写真を見た。

「ママがそうしたいなら……いいよ」

ずっと結婚しなかったママが、結婚したいって言うんだもん。きつとよっぽど考えぬいたことなんでしょ？

「ありがとう、海ちゃん！」

ママはそう言って私を思いきり抱きしめた。

でもあの写真のお父さんは、もっと若々しくて、こんなひげ面のほさほさ頭じゃなかったはず……

「ああ、センサーは漫画家だからね、締め切り前はひげを剃る暇もないのよ」

段ボール箱の荷物をほどこきながら、ママがあっさりと言う。

そう、新しいお父さんは漫画家。ペンネームは『うわの空』。何ともふざけた名前だ。

保険外交員のママと漫画家の『空センサー』が、どうやって知り合ったのかは知らないけど、私の知らないうちに、二人はずいぶん長い間付き合っていたらしい……

「忙しいのはわかるけど……初めて娘に会うのに、あのカツコはな いんじゃない？」

私が、さっそく仕事を始めた、お父さんの部屋のドアを見つめてつぶやくと、ママはおかしそうに笑った。

1 新しいお父さんがやってきた（後書き）

ジャンル「恋愛」なのかどうかわかりませんが…（ホームドラマかも？）

お付き合いいただけたら幸いです。
どうぞよろしくお願いいたします。

2 誰？

「空センサー、夕ご飯できましたよー」

引越し祝いのごちそうが並んだテーブルに、ぼさぼさ頭をかきながら、お父さんがやってくる。

「お、うまそうだな」

「すごいでしょ？ほとんど海が作ったのよ」

ママはそう言っつて自慢げに私を見る。

「ほおー、料理が得意なんだ、海ちゃんは」

お父さんはニコニコ笑い、から揚げを一つつまんだ。

「お、ホントだ！マジでうまいぞ、これは！」

「でしょ？私が仕事で家にいなかったから、海の料理の腕前が上がっちゃって上がっちゃって」

「ははは、いいじゃんか。海ちゃんはきつといい嫁さんになるぞ！」

私は少し顔を赤くしてうつむくと、部屋の隅につまれた段ボール箱を抱えて歩き出した。

「海、どこ行くの？」

「これ、外に出してくる」

「そんなの後で俺がやるよ」

「いい、ここに置いておくと邪魔だから……」

私はそう言っつて玄関の外へ出た。

部屋の空気があたたかい。いつも一人ぼっちか、ママと二人で食べていた夕食が、今夜はあの人のせいであたたかい。

それはきつといいことなんだろうけど……私は何だかあの場所に居づらくて、思わず外へ出てしまった。

その時私の目に、庭の桜の木をじつと見上げている男の姿が映った。

「誰……？」

恐る恐るつぶやく。すると、隣町にある高校の制服を着たその男が、独り言のようにつぶやいた。

「変わってねえな……この桜の木」

私はぼんやりとその声を聞く。薄闇の中で、桜の花びらがひらひらと舞い落ちる。

「誰なの？」

私のもう一度繰り返すと、男はゆっくりと振り返り、笑いながらこう言った。

「ここ、宇和野さんちでしょ？」

私の頭に漫画家の『うわの空』という名前が浮かんでくる。そうか……私の苗字は今日から『宇和野』になったんだっけ……

「そうですけど……」

「俺、『うわの空』の息子」

「え？」

「聞いてないの？俺、今日からここんちの子になるんだけど」
その時和室の窓が開き、ママが庭に向かって声をかけた。

「あら、しんちゃんじゃない！」

「こんばんは、バカ親父来てます？」

「来てるわよ、さあ、上がって上がって！」

「おじゃましまーす」

『しんちゃん』という男は、いたずらっぽい笑いを私に残し、縁側から家上がりこむ。私はあわててママに駆け寄った。

「ママ！誰なの、あの人！」

「え？心ちゃんよ。空センサーの息子さんの」

「聞いてないよ！息子がいるなんて！」

「あら、そうだったっけ？」

ママはそう言って首をかしげる。

「そういえばセンサーのことで頭がいっぱいで、心ちゃんのこと言
うの忘れてたわ」

「ママー」

私は情けない顔でママを見上げる。ママはそんな私を見てにっこり笑うところ言った。

「センチの息子さんだから、海のお兄ちゃんよね？」

私の、お兄ちゃん？……私は気持ちの整理がつかず、呆然とその場に立ち尽くした。

「ごめんね、心ちゃん。私、海にあなたのことまだ話してなくて」「いいですよ、別に」

「おい、心。あんまり海ちゃんが可愛いからって、この子に手え出しちゃダメだぞ？」

「出すわけねーだろ？俺、彼女いるし」

「あらまあ、心ちゃん彼女いるの？」

「いやー、こいつ俺に似てなかなかイケメンだから」

「よかつたわねー海。こんなステキなお兄ちゃんができて」

私は何も言わずに、箸をもったまま顔を上げる。

3人はテーブルを囲んで、私の作ったから揚げを食べながら笑っている。

嘘でしょ？私はこれからこんな人たちと一緒に暮らさなくちゃいけないの？

思わず涙目になった私を、正面に座る心がニヤニヤ笑いながら見つめている。

私は黙って目をそらすと、茶碗を抱え、ご飯を一気に口に押し込んだ。

3 初めての朝

『ママは仕事に行ってきます。お父さんとお兄ちゃんの朝ごはん、お願いね』

春の日差しが差し込むリビングで、パジャマ姿の私が、呆然とママの書いたメモを見つめる。

「お願いねって……ひどいよ……ママ」

私がつぶやいた時、リビングのドアが開き、眠そうな顔の心が入ってきた。

「おはよ、海ちゃん」

私はあわててはだけたパジャマを直す。

「だいじょうぶだよ、あんた見て発情したりしないから」

心はそう言っただけで笑いながら、ソファーにどかっとな腰掛けテレビのリモコンを押す。

「ねえ、海ちゃんち、ゲームないの？」

何なのよ、その態度！あんた何様のつもりなの！？

私は今にも叫びそうになる気持ちをぐっと抑え、何も言わずにキッチンに向かう。

「海ちゃん、俺、朝はパンにしてねー」

心がりモコンでチャンネルを変えながら言う。

私はもう一度リビングに戻り、心の手からリモコンを奪つと、いつも見ているニュース番組に変えた。

「私のうちは、毎朝このチャンネルなの！」

私が怒った顔で心を見る。心はそんな私を見ておかしそうに笑った。

30分後、テーブルの上には炊きたてご飯と味噌汁が並ぶ。

「海……お前ってけっこう強情だね？」

心がそう言っただけ私を見ながら椅子に座る。私は何も言わずに自分のご飯をよそる。

その時やっとお父さんの存在を思い出した。

「あ、そうだ、お父さん……」

私の声に心が顔を上げる。

「お父さんも……呼んだほうがいいかな？」

心は小さく笑うと、箸を持ってつぶやいた。

「呼ばないほうがいいよ。きっと昨日の夜から寝ないでマンガ描いてる」

「え、そうなの？」

「締め切り前だからな」

「でも少しは休んだほうが……」

「ほっとけよ。途中で中断させると機嫌悪いんだ、あの入」

心はそう言っただけ私の作った味噌汁をすする。私の胸が少し高鳴る。

「ねえ」

「な、何!？」

味噌汁の味……ちょっと濃すぎたかな!？」

心はそんな私を見てまた笑う。

「来週、俺の友達がここに来るから」

私は呆然と心の顔を見つめる。

「昼飯、何か作って」

心はそう言っただけ、味噌汁を一気に飲み干した。

4 いい人といい子

最低……どうして私があんたの友達のために、お昼ご飯作らなくちゃならないの？私は家政婦じゃないっての。

そう思っても言い返せない自分を情けなく思いながら、私は残りご飯でおにぎりを作った。そして自家製の漬物を添えると、そっとお父さんの部屋を覗いた。

「あの……」

小声でつぶやく。だけど、お父さんは机に向かったままこつちを見ない。

『途中で中断させると機嫌悪いんだ』

私はさっきの心の言葉を思い出し、黙ってその場におにぎりを置く。

「あの……あとで食べてください」

私がそう言っただけで部屋を出ようとした時、背中を向けたまま、お父さんがつぶやいた。

「海ちゃん」

「はい？」

私が答えると、お父さんは腕だけこつちに回して、一枚のグラビア写真を見せた。ビキニ姿の女の人がお尻を向けてポーズしている写真……

「悪いけど、こういうポーズしてくれないかな？実物見たほうが、うまく描けるんだよね」

私は顔を赤くしてその写真を見つめる。お父さんは振り向いて私に言った。

「あ、もちろん、服着たままでいいからさ」

「バカー！」

私はおにぎりを手に取ると、お父さんの顔めがけて投げつけた。

「さいてー！バカー！スケベオヤジ！」

そう叫んで部屋を飛び出す。そんな私の叫び声を聞いた心が、リビングから顔を出した。

「何やってんの？」

私は真っ赤な顔で心を見る。

さっきのエツチなポーズの女の人が、頭の中でぐるぐる回っている。

心はそんな私を見てまたまた笑う。

「知らなかったんだ？うちの親父エロマンガ描いてんだよ」

心がそう言っ、読んでいたマンガを私の前に広げる。

そのマンガの表紙にはちよっぴりエツチな女の子の絵と、『うわの空』という名前が書いてあった。

「海ちゃん！ごめん！ごめんね！」

部屋から飛び出してきたお父さんが、ご飯粒を顔につけて、必死に頭を下げる。

「徹夜明けでばーっとしてて……今、僕へんなこと言ったよね！？それに言っとくけど、僕のマンガはエロマンガなんかじゃないから……中高生でも読める健全なエツチマンガだから！」

「親父、言い訳しすぎ。それになんだよ、健全なエツチマンガって心がバカにしたように笑っている。私は何も言わずに階段を上がり、自分の部屋へ駆け込んだ。

「俺、海ちゃんに嫌われちゃったかな……」

「たぶんね。スケベオヤジ言われてたし」

二人の会話がかすかに私の耳に響いてきた。

桜が満開の14歳の春、私に新しいお父さんと、新しいお兄ちゃんができた。

お父さんは無精ひげをはやして、うちに来るなりエツチなマンガを描いている。

お兄ちゃんはでかい態度で、私のことを家政婦扱い。

だけどママは、そんな二人のことを笑ってこう言う。

「空センサーはあんなマンガ描いてるけど、ホントにいい人。心ちやんも口は悪いけど、すっごくいい子なのよ」

私は信じられない顔でママを見る。

ママは知らないんだ。

確かにママと『空センサー』は、長い付き合いかも知れないけど

……でもママは朝会社に行ってから、夜帰ってくるまで家にいないじゃない。春休みの私は一日中、会ったばかりのこの人たちと、一緒に緒の家にいるんだよ？

「いいじゃないの。家族なんだから」

ママはあっけらかんとそう言って、嬉しそうに笑う。

私は大きいため息をつくとき、窓から満開の桜の木を見つめた。

5 これが俺の愛情表現

「うひゃー、でかい家ー」

「心、お前すっげー金持ちの子みたいじゃん」

春休みの最後の日、私の家に高校生の集団がやってきた。

「海！リビングにジューズ持ってきて。8人分！」

キッチンから玄関を覗いている私に、心がえらそーに命令する。

「あー、この子が新しい妹の海ちゃん！？」

「かわいいねー、中学生？」

呆然と立ち尽くす私のまわりに、高校生たちが集まってくる。

ほめられてるのか、バカにされてるのか、よくわからない笑いを聞きながらうつむくと、心がまたえらそーに言った。

「海！早くジューズ持って来い！」

私はあわててキッチンへ駆け込む。

「おいおい、妹はもっと優しく扱ってやらなきゃ」

「そうよ、心ちゃん。かわいそうじゃない」

心は友達のことを聞いて、笑いながらこう答える。

「いいんだよ。これが俺の愛情表現なんだから」

はあ？愛情表現？いい加減なこと言っちゃって……

私は思いきり不機嫌な顔でグラスにジューズを注ぐ。

でもあいつのいいなりになってる私もバカだ。私の頭にママの言った言葉が響く。

『心ちゃんも口は悪いけど、すっごくいい子なのよ』

ママがあんなこと言うからいけないんだ。あんなこと言うから、もしかして優しいお兄ちゃんになってくれるかもって、へんな期待しちゃうじゃない……

「手伝わよ？」

その時私の隣に、髪の高い綺麗な女の人が見えた。その人は私に

につこり笑いかけ、もう1本のペットボトルを開ける。

「あ……すみません……」

「いいのよ。ひどいわよね、あなたのお兄さん」

私はぼんやりと、その人の細い指先を見つめた。左手の薬指に、何だか意味ありげなシルバリングが光っている。

するとその人はグラスののったお盆を持ち上げ、私の顔を見つめて言った。

「でも心ちゃんて、ホントはいい子なのよ」

私は黙って顔を上げる。

「なのに素直じゃないから、すぐあんな態度とっちゃうの。わかってあげてね？」

その人はそう言うと、くすつと笑って、ジュースをリビングへ運んでいく。

「はい、ジュース」

「お、サンキュー。麻利ちゃん」

麻利というその人が、テーブルにグラスを並べ、さりげなく心の隣に座る。そして何やら心の耳元でささやくと、二人でおかしそうに笑い出した。

「何なのよ……」

私はそんな光景を見ながらつぶやき、空のペットボトルを思いきりゴミ箱に投げ捨てた。

6 お料理上手

「お、うまい、この煮物！サイコーだな、海ちゃんの料理は」

夕食のテーブルで、お父さんが私の作った料理を食べながら嬉しそうに言う。

「でしょー？14歳でこんなに料理が上手な子なんて、そうそういないわよ」

ママもそう言って、ニコニコしながら箸で煮物を持ち上げる。

私は何も言わずに黙々とご飯をほおばる。

「そういえば今日の昼飯もうまかったな」

その時ポツリと心が言った。

「あら、お昼は何だったの？」

「たらこスパ、8人分作ってくれた」

私はぼんやりと顔を上げ心を見る。もしかしてこいつ、私に感謝してるのかな？

心は私を見て小さく笑うと、すぐに目をそらしてご飯を口に入れる。

「そうなの！？海はお料理上手だから、どんどん使ってやってね！」

「ママ！」

私は怒った顔でママを見る。

「そんなこと言わないでよ！私は家政婦じゃないんだから！」

「やあねえ、何もそんなこと言っただけじゃない」

「それに私だって、お料理うまくなりたくてなったわけじゃないもん。ママが仕事でいなくて仕方ないから、作っただけだもん」

私はそうつぶやくと、何だか自分で自分がむなしくなってきた。

そうなんだ。パパが死んで、ママと二人暮らしになってから、私は仕方なく毎日食事を作り続けただけなんだ。

「うん。海ちゃんは偉いよ」

その時私の耳にお父さんの声が響いた。

「海ちゃんは偉い！うちの能無し息子とは大違いだ」

お父さんはそう言って、心の頭をぐしゃぐしゃかき混ぜながら、私に微笑む。

「うぜーな、なんだよ？」

「お前も少しは見習ったらどうなんだ？料理の一つも作れないくせに」

「あんだだっ作れねーだろ！？」

私はそんな二人を見て、くすつと笑う。

「じゃあいつも何食べてたの？」

「よくぞ聞いてくれました、海ちゃん。俺たちはむさくるしい男二人暮しで、得意料理といえば、インスタントカレーぐらいで……」

「そんなもん自慢すんな」

「だから俺たちは海ちゃんの料理を食べれて、天にも上がるほど幸せなんだよ」

お父さんはそう言って、本当に幸せそうに私を見つめる。私は何だか嬉しくなって、胸の中がほんわり温かくなる。

その時、私の隣のママがいきなり立ち上がった。

「ママ？」

顔を上げママを見る。ママの目からは、大粒の涙があふれていた。

「ママ、どうしたの！？」

「ううん、何でもないの……何でもないのよ」

ママはそう言って私に笑いかけると、ハンカチで目を覆ってキッチンを出て行った。

「ママ……」

私は呆然とママの背中を見送る。

そしてそんな私を、お父さんとお兄ちゃんは何も言わずに見つめていた。

7 空と海

『おはよう！海ちゃん。今日から新学期だね。ママは先に仕事に行くので、後のことよろしくね』

久しぶりに制服を着た私は、いつものようにママのメモを見つめる。

「おはよう！海ちゃん！」

その時すがすがしい顔のお父さんがリビングの中に入ってきた。

「お、おはよう」

「いやー、原稿が上がった朝は気持ちがいいねえ」

「マンガ描けたの？」

「うん。海ちゃんの作ってくれた夜食のおかげだね」

お父さんはそう言って嬉しそうに笑う。私もそんなお父さんの笑顔を見て微笑むと、エプロンをつけてキッチンに立った。

「今、朝ごはん作るね」

「俺も手伝おうか？」

「いいよ。お父さんはそこに座ってテレビでも見せて」

私の言葉にお父さんがニコニコしながら椅子に座る。

「海ちゃん」

「はい？」

「海っていい名前だね」

突然の言葉に戸惑いながら、私はお父さんを振り返る。

「ママがつけてくれたの……」

「そうか。俺は空で、キミは海。二人合わせて空と海だね」

お父さんはそう言って子供みたいな笑顔を見せる。

「『うわの空』って本名なの？」

「そうだよ。俺の名前は空」

お父さんが目を細めて私を見つめる。

「いい名前だろ？」

私はお父さんを見てにつこり笑う。お父さんも私を見つめ、幸せそうに笑った。

「海！何で起こしてくれなかったんだよ！」

制服のネクタイを首からぶらさげた心が、あわてた様子で部屋から出てくる。

「知らないよ。何時に出るの？」

「7時半のバス！」

「もう7時半だよ？」

「だから、何で起こしてくれねーんだよ！」

心はそう言いながら私にパジャマを放り投げる。

「うるさい、心！お前は高校生にもなって一人で起きられんのか？」

「うるせー、親父！起きてたなら俺を起こせよ？新学期から息子を遅刻させるつもりか！」

「そんなの自分が悪いんだろ！」

お父さんの言葉はもつともだ。私はうんうんとうなずく。

心は私たちの顔を見比べると、あきらめたようにテーブルの席についた。

「ご飯食べるの？」

「どうせ遅刻なんだ。メシ食ってから行く」

私は心の茶碗にご飯をよそりながらふふつと笑う。

「なんだよ？」

「その頭……すごい寝癖」

「黙れ。これから直すんだよ」

心はそう言って私の手から乱暴に茶碗を受け取る。その時私は少し意地悪を言ってみたくなった。

「そんな頭じゃ、麻利さんに嫌われちゃうね？」

心が顔を上げて私をにらむ。やば、こいつ怒らせたなら怖いかな…
…ちよっぴり後悔した瞬間、心の指が私の鼻をつまんだ。

「うるせーんだよ。彼氏もないガキのくせに」

私は鼻をつままれたままぼんやりと心の顔を見る。心はそんな私を見て、えらそーに笑った。

8 お兄ちゃんの彼女

「海ー！見たよー！」

新学期の教室に入るなり、私のまわりにクラスの友達が集まってくる。

「今朝、男と一緒に歩いてたでしょ！？」

「隣のS高の制服だったよ！」

「誰なのー？あんたいつの間に彼氏できたの？」

機関銃のように言葉を発射する友達に、私は小さくため息をつきながら答えた。

「あの人は私の新しいお兄ちゃんだよ」

友達は一瞬静まり返り、また口々にしゃべりだす。

「えー？もしかしてママの再婚相手の？」

「そう。再婚相手に息子がいたの」

「何それ！？ドラマみたいじゃん！」

「あんたあんなかつこいー人と一緒に住んでるの！？」

「かつこいーったって……お兄ちゃんだよ？」

「でも全然血のつながりはないんでしょ？」

血のつながりがない…確かにあいつと私は、兄妹だけど兄妹じゃない。

私はぼんやりと心の顔を思い浮かべる。するとそのすぐ後に、あの麻利という綺麗な女の人の顔が浮かんできたから、私はあわてて頭を振った。

「ただいまあ」

その日学校から帰ると、めずらしくキッチンからおいしそうな匂いが漂ってきた。

「お帰りー！海ー！」

「ママ？」

私が驚いた顔でエプロン姿のママを見る。

「どうしたの？」

「久しぶりに早く仕事が終わったからね。たまには夕ご飯でも作るうかと」

ママはそう言って私ににっこり笑う。

「ふーん」

私はめちゃくちゃに散らかっているキッチンを見つめる。

料理嫌いなママが自分から料理をするなんて、昨日私が言ったこと、もしかして気にしてるのかな……

「あ、そうだ。心ちゃんの部屋にお友達が来てるから、これ持って行ってあげて」

ママがそう言って、お盆にのったコーヒールとお菓子を差し出す。

そういえば玄関に見慣れない女の靴があったっけ……

「心ちゃんのお友達って……彼女？」

「知らないけど、すごく綺麗な女の子だったわよ」

ママが私の耳元でささやき、少女みたいにいたずらっぽく笑う。

私は何も言わずにお盆を持つと、心の部屋のドアをノックした。

「どうぞ」

「ありがとう」

コーヒールをテーブルに並べる私に、麻利がそばでにっこり微笑む。心は勉強机の椅子の背にもたれて、そんな私たちをニヤニヤ笑いなから見ている。

「昨日はごちそうさま。おいしかったわよ、スパゲティー」

「いえ……」

私は照れくさくて、麻利からさりげなく顔をそらした。

「海ちゃんて、かわいいし、お料理上手だし、自慢の妹さんよね？」

麻利がそう言って心を見る。

「こいつはただのお子ちゃまだよ」

心は私を見ながらおかしそうに笑う。ふん！何さ！私と2つしか

違わないくせに！

「ほらな、こつちやってすぐ怒るし」

「やあねえ、心ちゃんが怒らすようなこと言っからでしょ？」

二人はそう言いあってくすくす笑い出す。

「それじゃあ、どつぞ、どつぞっくり！」

私は嫌味まじりに二人に言つと、お盆を抱えて心の部屋を後にした。

9 そっじゃないんだ……

「どう？センサー。おいしいかしら？」

恐る恐る料理を口に入れたお父さんに、ママがつきつきしながら尋ねる。

「うーん……これは……」

「どう？おいしい？まずい？」

「いやあ、何とも言えん味だな、こりゃ……」

お父さんは困ったようにママの料理を箸でつまむ。

「ママ、お父さん困ってるじゃない」

「どうして？今夜の料理は自信作なのに」

ママはしょげた顔でうつむいたが、すぐに顔を上げてにこやかに笑った。

「そっだわ！心ちゃんにも食べてもらおう！」

私はカーテンの向こうの薄闇を見つめる。

「彼女をバス停まで送っていったよ」

「もう帰ってくる頃でしょ！？海、ちよつと外行って呼んで来てよ！」

「えー？何で私が？」

「早く早く！お料理冷めちゃうじゃない！」

私はしぶしぶ立ち上がると、一人玄関へ向かった。

サンダルを履いて外へ出る。するといきなり強い風が吹きつけ、

私は両手を抱え込み立ち止まった。

「しん……ちゃん？」

薄暗い庭先でポツリとつぶやく。

桜の花びらが、雪のように舞い落ちている木の下で、心がゆっくりと私に振り返る。

それはまるで、私たちが初めて会ったあの日のように……

「何やってんの？」

私の言葉に心はほんの少し笑い、そしてまた桜の木を見上げた。

「桜……散っちゃうな……」

その声はどこか寂しげだった。いつもの偉そうな態度の心とは違う人みたいだった。

私はそつと心に近寄り立ち止まる。

「私のパパ……この桜が大好きだったの……」

私の頭にかすかな幼い日の記憶がよみがえる。

「私が覚えているパパとの思い出は、この木の下で肩車をしてもらったこと……ただそれだけ……」

そう、春の日差しが眩しいこの庭で、私はパパと楽しそうに笑っていた。

ママはそんな私たちを見て、幸せそうに笑っていた。

私はパパが大好きだった。ママもパパが大好きだった。そしてパパは私とママが大好きだった。

それなのに、私たちを残して、パパは突然事故で死んでしまった

……

にじみ出す涙を服の袖でこすり、私は隣に立つ心を見た。心は何も言わずにじつと桜の木を見上げている。

「心ちゃんの、お母さんは？」

私は心の横顔につぶやく。

「心ちゃんのお母さんも亡くなったの？」

その言葉に心は視線を私に移した。私たちはほんの一瞬だけ見つめあう。私を見つめる心の瞳が、なぜかとても哀しく見える。

「生きてるよ」

強い風が私たちの間を吹き抜ける。

「俺の母親は生きてる」

私はぼんやりとその声を聞く。心はそんな私に、ふっと笑ってこつと言った。

「残念だったな。俺とお前は違うんだ」

私の胸に心の言葉が突き刺さる。心はバカにしたような目つきで私を見て、何も言わずに玄関へ入っていった。

私は一人、桜の木の下に立っていた。頭の上から、花びらがひらひらと舞い落ちてくる。

もしかして心も同じだと思った。心も寂しいんだと思った。心なら私の気持ちをわかってくれると思った。

「でも、そうじゃないんだ……」

私の目からなぜか涙があふれ、止まろうとはしなかった。

10 それが親父の仕事なんだから

「なあー、確か海の新しい親父さんて、漫画家だったよなあ？」
放課後の教室で、クラスの男子が私に言う。

「そうだけど……」

私は嫌な予感を感じながら、ゆっくりと顔を上げた。

「もしかして海の親父って『うわの空』？」

そう言っただけで目の前の男子が、マンガ雑誌をぴらぴらさせる。

「えーマジ？お前の父ちゃん『うわの空』？」

「なあに？『うわの空』って？」

「バーカ、お前ら知らねーの？」

私のまわりにはいつの間にか男子も女子も集まってくる。

「あんなー、『うわの空』ってゆうのはなー」

一人の男子がマンガ雑誌をめくろうとした時、私は思わずそれを奪い取った。

「やめて！見ないで！」

「海？」

何も知らない女の子たちは私のことを不思議そうに見つめる。

健全な？エッチ漫画家『うわの空』を知っている男子たちは、私を見てニヤニヤと笑っている。

私はマンガ雑誌をかばんの中につっこむと、逃げ出すように教室を飛び出した。

息を切らして通学路を走り抜ける。家の中に飛び込み玄関のドアを乱暴に閉める。

頭の中に、さっきの男子の笑い顔がまだ浮かんでいる。

「どうしたの？」

そんな私に声をかけたのは、あのお父さんだった。

「何でもない……」

私はつぶやくと、靴を脱いでリビングを覗いた。リビングでは心がソファーに寝転がり、テレビをつけながらマンガを読んでいる。

「海ちゃん、コーヒー飲むかい？お父さんがいれてあげるよ」

お父さんは私の背中にそう言っ、キッチンへ消えていく。私は何も言わずにソファーに近寄ると、心の前で立ち止まった。

「何だ、海か……」

心が雑誌から目をそらし、私を見上げる。私は心の手からその雑誌を取り上げると、フローリングの床に投げ捨てた。

「何すんだよ？」

「このマンガがいけないだもん……このマンガのせいで私は……」
いつの間にか私の目から涙があふれる。心は黙って床に落ちた雑誌を拾うと、そんな私にこう言った。

「お前それ、本人に言ってみな？」

私は唇をかみしめ心を見る。

「こんなくだらねえマンガのせいで、私は友達に笑われたって、『うわの空』に言ってみな？」

キッチンではお父さんが鼻歌を歌いながらコーヒーをいれている。私はちらりとそんなお父さんの背中を見た後、うつむいてつぶやいた。

「そんなこと……言えるわけない……」

「だったら我慢しろ。それが親父の仕事なんだから」

心は私にそう言っ、また雑誌を読み始めた。

「海ちゃん、コーヒーいれたよー。一緒に飲もうかー」

お父さんがニコニコしながら、私の前にコーヒーを差し出す。

「親父……俺のは？」

「あ？お前いたの？」

「いただろーが！さっきからずっとここに！」

「うるさい！自分でいれる！さあ、海ちゃん、こっちおいでー」

お父さんが嬉しそうに私を呼ぶ。心は雑誌を放り投げ、リビングを出て行く。

私はそんな二人を見て、いつの間にか微笑んでいた。

もう期待するのはやめた。

この人と私は生まれ育った境遇も違うし、生活習慣も違うし、考え方も違うし……

この人と私は同じだって思った私がバカだった。

私のことを思いやってくれる優しいお兄さんなんて、この世にはいないのだ。

そう思ったら少しだけ心が軽くなって、夏が始まる頃、私はこの『新しいお兄ちゃん』の意地悪も、笑顔でかわせるようになっていた。

11 泳げない理由(わけ)

「夏休みになったら、海に行こうか？」

私の作った夕食を食べながら、お父さんがにこやかに笑う。

「いいわねー、白浜あたりどう？」

「お、いいねー。海ちゃんと心も行くだろ？」

そう言ってお父さんが私と心の顔を見比べる。

「げ、冗談だろ？高2にもなって、誰が家族と旅行なんか行くか」

「無理すんなよ？海だぞ、海。お前海好きだろが？」

お父さんが箸を持った手で、隣の心をつつく。心はうんざりしたような顔でつぶやいた。

「海だったら、麻利と行くからいい」

その一言で和やかな家族の食卓がしんと静まる。お父さんは笑ってごまかしながら、今度は私に顔を向ける。

「海ちゃんに行くだろ？」

私はそんなお父さんを見て苦笑いをする。

「私も行かない。だって泳げないんだもん」

「えー？『海ちゃん』なのに泳げないの？」

お父さんがおかしそうに笑う。私もつられて笑いながら、お父さんに向かってこう言った。

「私子供の頃、川でおぼれかけて……それから水が怖くてダメなんだ」

私の言葉に一瞬また食卓が静まり返る。え？私何かヘンなことを言った？

「ど、どうしたの？みんな黙りこんじゃって……」

私がお父さんとママの顔を見回した時、いきなり心が立ち上がった。言った。

「じゃあ泳ぎの練習でもしてくるんだな。また誰かに突き落とされても、おぼれ死なないように」

心は私を見てふつと笑うと、一人キッチンを出て行った。
私は呆然とそんな心の背中を見つめ、あの日のことを思い出す。
あれは私が小2の時、学校帰りに見知らぬ男の子が声をかけてきた。

「海ちゃん。一緒に帰ろう」

その子は隣の小学校の名札をつけていたのに、なぜか私の名前を知っていた。

「いいよ」

私がそう言つと、その子は嬉しそうに笑い、私の手をひっぱった。

「あつちの川沿いの道を歩こうよ」

「え、でもあそこは危ないから、ママが通っちゃダメだって……」

「へいきだよ！おいで！」

私はその子に手を引かれ、引きずられるようにして川沿いを歩く。
おかしなことにその子は、私のパパが死んじゃっていないことも、私のうちに大きな桜の木があることも、何もかも知っていた。

「ねえ……どうして私のこと知ってるの？」

私が立ち止まりつぶやくと、その子はほんの少し笑つてこう言った。

「僕はお前が嫌いだから」

次の瞬間、私は背中を突き飛ばされ、川の中へ落とされた。

水が、目に耳に口に入り込み、息が苦しくなる。

たすけて……声にならない声を上げた時、土手の上から私のことをじっと見下ろしている、男の子の姿が見えた。

「ママが話したのよ、心ちゃんとセンサーに。海ちゃんが知らない子に突き落とされて、おぼれかけた話」

呆然とする私の顔をママがにつこり笑つて覗き込む。

「ごめんな、海ちゃん。嫌なこと思い出させちゃったみたいでさ」

私は顔を上げ、お父さんに笑いかける。

「大丈夫だよ、あの時はすぐに大人が飛び込んで助けに来てたし……」

「しかし心のやつ、何であんな言い方するんだろな。あとでお父さんが、一発殴ってやるからな」

お父さんはそう言ってお父さんの前で力こぶを見せる。私はそんなお父さんを見て笑いながら、必死に昔の記憶を呼び戻していた。

あの子の、胸についてた小学校の名札。

全部の漢字は読めなかったけど、2年生の私が読める漢字が一つだけあったはず……

……『宇和野心』

私の頭にその4文字がぼんやりと浮かんだ。

12 わすれもの

次の朝、私は寝不足の頭のまま、ぼんやりと朝食を作り、自分の支度をして外へ出た。

頭の上では初夏の太陽が輝いている。

昨日の晩はあの名札のことが頭から離れなくて、ほとんど眠ることができなかつた。

「こらー！海ー！」

その時リビングの窓が開き、パジャマ姿の心が私に怒鳴った。

「何で俺を起こさねーんだ！自分ばかりさつさと支度しやがって！俺は完全に遅刻じゃねーか！」

私はそんな心の顔をじつと見つめる。

まさかね……まさかこいつが、あの時の男の子だなんて……

その時心の頭を、後ろからお父さんが小突いた。

「うるさいんだよ！自分で起きろって言ってるだろうが！」

そして何か言いたげな心を押しのけ、私に向かって笑顔で手を振る。

「海ちゃん！いつてらっしゅい！」

私はにっこり笑うと、お父さんに手を振り歩き出した。

「宇和野さーん」

教室に入った私に、隣のクラスの男子がニヤニヤしながら寄ってくる。

こいつらの言いたいことはわかってる。だって今日は『うわの空』の載ってる雑誌の発売日だから。

「宇和野さんはいいよなー、お父さんが漫画家で」

「しかもあの『うわの空』だろー？」

そう言って一人の男子が私の前で雑誌をめくる。

そこにはお父さんの描いたマンガの、エッチな女の子が載ってい

た。

私は何も言わずに目をそらす。

「ちよつとあんたたち、いいかげんにしなよ！」

「そうだよ！だいたいそんな雑誌、学校に持ってきちゃいけないでしょ！」

クラスの女の子たちが私のために怒鳴ってくれる。

「そんな雑誌とは失礼だよな？宇和野さん？」

そう言いながら私の顔を覗き込むのは、坊主頭の2組の綾瀬。私はこいつのことが1年の時から大嫌いだ。

「でもこういうマンガ描くときつてさ、モデルとか必要なんじゃないの？ねえ、宇和野さん？」

綾瀬が気持ち悪い笑いを浮かべて、雑誌と私を見比べる。

私はこいつのことを殴り飛ばしたくて右手をギョツと握ったが、真っ赤になった顔を見られるのが悔しくて、うつむいたまま唇をかみしめた。

「義理の父ちゃんが『うわの空』かー、それってちよつと危なくないかい？」

綾瀬の言葉に男子たちが笑い出す。私の目から涙がこぼれそうになった時、誰かが綾瀬の手から、その雑誌を取り上げた。

「義理の父ちゃんが『うわの空』じゃ悪いかよ？」

聞き慣れたその声に私がゆっくり顔を上げると、S高の制服を着た心が笑いながら私を見ていた。

「しん……ちゃん？」

私は呆然と心を見つめる。

「な、何だ？お前」

「俺？」

綾瀬の声に、心は雑誌を放り投げ答える。

「俺は『うわの空』の息子だよ」

綾瀬たちが驚いた顔で心を見る。

「えー？じゃあ、この人が海のお兄さん!？」

「海のこと、たすけに来たんですかー？」

クラスの女の子たちがおもしろそうに騒ぎ出す。

「ぶ、誰がこんなガキ、たすけにくるか」

心は小さく噴出すと、私の頭に包みに包まれた弁当箱をポンと
せた。

「忘れもん」

私は頭の上の弁当に手を当て、ぼんやりと心を見上げる。

心はそんな私を見ておかしそうに笑うと、ポケットに手をつっこみ教室を出て行った。

「ひつでえなー、高校生が出てくるなんて」

「反則だよ」

綾瀬たちが文句を言いながら、私のまわりから去っていく。

「ねーねー、海のお兄さん、かつこいーじゃん？」

「しかもS高！頭もいいんだ」

私はそんな友人たちを見てにつこり笑うと、立ち上がって窓を開け、校庭を見下ろした。

「しんちゃんーん！」

ちょうど校舎から出てきた心が立ち止まり私を見上げる。

「ありがとー！」

私が弁当箱を思い切り振ると、心は小さく笑って、校庭を出て行った。

13 揺れるころ

この忘れ物事件があった後、私の心に対する気持ち、ちょっと変わっていった。

「何、人の顔見てニヤニヤしてんだよ？」

エアコンの効いたリビングのソファに、いつものように寝転がっている心が、雑誌の隙間から私を見る。

「別に」

私はにっこりとそんな『お兄ちゃん』に向かって笑いかける。

「うちのクラスの女の子たちが騒いでたよ。海のお兄さん、かっこいいって」

「ふん、そんなコドモに言われたって、別に嬉しくないね」

「無理しちゃってー、心ちゃんだって2年前まで中学生だったくせに」

私がそう言って笑った時、玄関のチャイムが響いた。

「誰だろ……」

立ち上がるうとした私を押しつけるように、心が雑誌を投げ捨て、リビングから飛び出す。

私はその素早さにあっけにとられながら、そっと玄関を覗いた。

「あ、こんにちは、海ちゃん。おじゃまします」

するとそこには長い髪をアップにした麻利が、にこやかに立っていた。

「海。俺の部屋のぞくなよ」

「の、のぞくわけないじゃん！」

心はおかしそうに笑うと、麻利の手を引き自分の部屋に向かう。

私は麻利の左手に光るリングを見つめながら、思わずつぶやいた。

「麻利さんが来たからって喜んでちゃって」

「何だと？」

心が振り返り私をにらむ。私は少しビビって後ずさりをする。

心はそんな私をじっと見つめると、ニヤリと笑ってこう言った。

「そういうこと言ってるよ、もうたすけてやんねーぞ」

私は顔を赤くして心を見る。

「なあに？たすけるって？」

「この前このバカが、弁当忘れやがってよー」

心は笑いながら麻利の肩を抱いて、私の前を通り過ぎる。そして自分の部屋に入ると、ドアをわざとらしくボタンと閉めた。

「何よ！バカ心！」

私は閉められたドアに向かって大声で叫ぶ。

「何よ……バカ……」

ドアの向こうからかすかに二人の笑い声が聞こえ、私は黙ってその場を去った。

「どうしたの？海ちゃん。こんなところに一人で……」

あたりが薄暗くなった頃、私は和室の縁側に座り、広い庭をぼつと見つめていた。

「あ、お父さん。原稿上がったの？」

「うーん、もうちょっと」

お父さんはそう言って伸びをすると、私の隣に腰掛ける。

夏の始まりの蒸し暑い風が、私たちの髪をそつと揺らした。

「ここからの眺めが一番いいなあ」

お父さんは目を細めながら広い庭を眺める。

「来年の春はここでお花見しよう！」

そう言って笑うお父さんは、何だか子供みたいで可愛い。

どうしてこんなに優しいお父さんの子供が、あんなに口の悪い心なんだろう……

私はそんなことを考えながら、今までずっと聞きたかったことを聞いてみる。

「ねえ、お父さんと、心ちゃんの本当のお母さんは、離婚しちゃっ

たの？」

「え……」

お父さんの顔色がかすかに変わる。そしてさりげなく私から目をそらすと、小さな声でつぶやいた。

「心が、そう言ったの？」

「ううん」

私は首を横に振る。

「でも、亡くなったわけじゃないんでしょ？心ちゃんがお母さんは生きてるって……」

「うん……そうだよ……」

お父さんはそうつぶやいたきり、うつむいて考え込んでしまった。私はよっぽどまずいことを聞いてしまったと思い、あわててその場を立ち上がる。

「別にいいの！言いたくないことだったら、言わないで。私は全然気にしないから」

「海ちゃん！」

お父さんが何か言いたげに立ち上がる。

その時、心と一緒に部屋を出てきた麻利が、私たちに気づき頭を下げた。

「どうも……おじゃましました」

私はぼんやりと麻利の髪を見つめる。さっき来た時は綺麗にまとめ上げていた髪が、今はほどけて肩にかかっている。

「行くぞ、麻利！」

心が靴を履きながら麻利を呼ぶ。麻利はもう一度私とお父さんに会釈すると、心の後を追って玄関を出て行った。

「あいつ、女の子なんか部屋に連れ込んで……10年早いんだよ」

お父さんが独り言のようにつぶやき、頭をかく。

「お父さん。今ご飯作るからちよっと待っててね」

私はそんなお父さんに声をかけ、キッチンへ向かう。

「今夜はお父さんの好きな焼肉だからね！」

私がそう言って笑うと、お父さんも私に笑い返した。
だけど私の頭の中では、麻利の肩を抱く心の姿がどうしても離れ
なかった。

14 行かないで

「海。俺と一緒に海に行かないか？」

私の前で心が手を差し出す。

「でも……私泳げないもん」

「『海ちゃん』なのに泳げないの？」

心はそう言うっておかしそうに笑うと、私の手を強引に引いて歩き出す。

「この川沿いを歩いて海に行こう」

「ダメだよ。この道通るとママに怒られる」

「ママにねえ？」

私は立ち止まり、ぼんやりと心を見る。

「お前にはママがいていいね？」

「何……言ってるの？」

「だから俺はお前が嫌いなんだよ」

心は私を見下ろすようにして笑うと、その手で私の背中を突き飛ばした。

「いったーい……」

夏休みの1日目。私はへんな夢を見て、ベッドの上から転がり落ちていた。

「何でかい音立ててんだよ？」

部屋のドアが開き、帽子をかぶってリュックを背負った心が、パジャマ姿の私を見る。

「バカ！勝手に開けないでよ！」

「海ちゃん、浮き輪貸して」

心は私の声を完全に無視して、ずかずかと部屋の中に入って来る。

「浮き輪？あんた泳げないの？」

「アホか！俺が使うんじゃないやねえ、麻利に貸してやるんだ」

心はそう言うと、私のクローゼットの中を勝手に物色しだした。
はあ？何で私があんたの彼女に浮き輪を貸してやらなきゃなんないの？

私はムカつく胸を押さえながら、引き出しの中から浮き輪を取り出し、心の前に差し出した。

「お、やっぱりあった。サンキュー」

心の差し出す手を振り払うように、私は浮き輪を後ろに隠す。

「どこ行くのよ？教えてくれないと貸してあげない」

「あのなあ、お前な……」

心は大げさにため息をついた後、私を見つめてこう言った。

「海に行くんだよ。麻利と、泊まりで」

「泊まり!?!」

私が思わず声を上げる。

「そんなのママとお父さんが許してくれるの?」

「バーカ、そんなん、いちいち親の許可もらって行くやつがあるか!」

「じゃあ内緒で行くの?」

心は胸をドキドキさせている私に近寄り、そつと耳元でささやいた。

「『お兄ちゃんは友達の家泊まりに行きました』って言うっておけ」

私は呆然と心を見上げる。心はそんな私に笑いかけると、浮き輪を取り上げリユックにつっこみ歩き出した。

「ちよつと待って!」

私が思わず心の腕をつかむ。

「行かないで」

心が振り返り私を見る。

「行かないですよ。心ちゃん」

私はじつと心を見つめる。心の腕をつかむ自分の手が、かすかに震えている。

「ぶ、バツカじゃねーの?」

心はそう言つと、おかしそうに笑い出した。

「妹よ、兄ちゃんがいなくなるのが、そんなに寂しいか？」

「違う！」

「そういうのを『ブラコン』って言うんだぜ？」

「違うつてば！そんなんじゃない！」

私はなぜだか泣きたくなるのを必死でこらえながら、心の腕を握り締める。

「あの人と一緒に、行ってほしくないの！」

心が黙つて私を見た。私は思わず目をそらす。

次の瞬間、私はベッドの上に突き倒された。

「バカだ、お前は。兄貴にやきもち妬いてどうする？」

私はベッドから起き上がり心を見上げる。心は軽蔑するような眼差しで、私のことを見下ろしている。

「兄貴なんかじゃないじゃん……」

自分の胸の音が、大きくなっていくのがわかる。

「私たちが何の血のつながりもない、赤の他人でしょ！？好きになつたつておかしくないじゃん！」

「へえ……好きにねえ……」

心は私の言葉に小さく笑つと、ベッドの上に腰掛け私を見た。

「お前、俺に惚れてんだ？」

私は赤くなつた顔を心から背ける。

しかし心は、そんな私の頬に手を添えると、無理やり自分の方へ顔を向かせた。

「お前を殺そうとしたこの俺に、惚れてんだ？」

私はぼんやり心を見つめる。心は冷たい笑みを浮かべながら、その手を私の首に回した。

「何……するの？」

私は声を震わせつぶやく。

「私を……殺すの？」

心はおびえる私を見て笑い出すと、もう一度ベッドに倒した。

「冗談だよ。バーカ」

ベッドに仰向けになったままの私に心が言う。

「2、3日帰ってこないから。ママたちに言っというて」

心は軽く手を振ると、リュックを肩に掛け部屋を出て行った。

残された私はベッドに倒れたまま、ぼんやりと天井を見つめる。

『お前を殺そうとしたこの俺に、惚れてんだ？』

なに、それ………どういう意味？

そして私を川に突き落とした男の子の顔が、心の顔と重なり合う。

私は小さく身震いすると、布団の中にもぐりこみ、ただ恐ろしさ

に震えていた。

15 私の居場所

夕食が並ぶテーブルに、仕事から帰ったママがやってきて言う。

「あら？心ちゃんは？」

私は茶碗を持ったまま小さくつぶやく。

「心ちゃんは友達の家泊まりに行った。2、3日帰ってこないって」

「あら、そう……」

ママはそう言って箸をとる。そしてしばらく沈黙が続いた後、お父さんが顔を上げて言った。

「友達の家って、麻利ちゃんちかな？」

私は思わず茶碗を落としそうになるのをこらえて、お父さんを見る。

すると私の隣のママも、おかずをつまみながらこう言った。

「ホントに家かしら？旅行にでも行ったんじゃない？」

「そうだあいつ、麻利ちゃんと海行くとか言ってなかったか？」

「そういえば今朝、この家に浮き輪はないかとか聞いてきたわよ？」

2人の視線が私に集まる。

私って嘘つき？……いや、嘘つきはあいつだから！私は言われたとおり言っただけだから！

3人の食卓は静まり返り、何とも言えない空気が漂う。

その時突然お父さんが立ち上がり、私たちに言った。

「よし！あんなやつほっといて、3人で海に行こう！」

「え！？」

私が驚いて顔を上げる。

「海ちゃんは夏休みだし、俺は原稿が上がったばかりだし」

「いいわねー！それならママもお休みとるわよ！」

「ちよ、ちよっと待ってよ」

私は困った顔でニコニコ顔のお父さんとママを見る。

「でも……私泳げないし」

「大丈夫！お父さんがついてるから！」

お父さんはにっこり笑って、自信ありげに胸を叩く。

「あら、センセーもかなづちじゃなかったっけ？」

ママが横から口をはさむ。

「おいおい、それを言うなって！」

私は何だか嬉しくなって、いつの間にか2人と一緒に笑っていた。

3人で行った旅行はサイコーだった。

きれいな海に美味しい料理。海辺の露天風呂も気持ちよかった。

「ママー、見てみて！夕日がきれいだよー」

少し肌が焼けた私が、砂浜に駆け出し声を上げる。

「ホント。きれいねえ」

ママはそう言って手をかざし夕日を見上げる。お父さんはそんなママの背中を、眩しそうに見つめている。

私は2人から目をそらし、砂浜を走り、岩場の向こうのオレンジ色に広がる海を見た。

「うわー、きれい……」

思わずつぶやき、ため息をもらす。

「海ー、やっぱり来てよかったわねー」

私の背中にママの声が聞こえる。私は小さくうなずいた後、ふと心のことを思い出した。

春に私の家にやってきた、血のつながらないお兄ちゃん。

口が悪くて態度がでかくて、彼女と海に行ったお兄ちゃん。

次の瞬間、波の音にまぎれて、心のあの冷たい声が聞こえてきた。

『お前を殺そうとしたこの俺に、惚れてんだ？』

私は胸が詰まりそうになり、ママたちのいる砂浜を振り返る。

するとそこには肩を抱いて寄り添いあう、ママとお父さんの姿があった。

「ママ……」

2人は私のことなど忘れたかのように、幸せそうに夕日を見ている。

そんな2人の姿が、心と麻利の姿と重なって、私は呆然と立ち尽くした。

「私だけ……ひとりだ……」

波が岩に打ち付けられ、波しぶきが頬にかかる。

ママは私だけのママだった。でも今はお父さんのためのママ。

そして新しいお兄ちゃんも、私のために現れたわけじゃない。

この家に私の居場所はあるの？

なぜだか私は無性に寂しくなり、涙があふれそうになるのを必死でこらえていた。

16 冷たい手

2泊3日の旅行を終えて、私は住み慣れたこの家に帰ってきた。庭の桜の木には緑の葉が生い茂り、セミの鳴き声が騒がしく聞こえる。

私は家の鍵を開け、リビングの扉を開く。

するとエアコンをガンガンに効かせた部屋の中で、心がソファーに寝転がり雑誌を読んでいた。

「心ちゃん……帰ってたの？」

私がつぶやくと、心は雑誌の隙間から私を見つめ小さく笑った。

「お帰り。海ちゃん」

私は少し日に焼けた心の顔をじっと見つめる。心は起き上がるとそんな私に言った。

「親父たちと海行ってたの？」

「うん……」

リビングの窓からは、庭先のガレージで車から荷物を降ろしている、ママとお父さんの姿が見える。

「これ、おみやげ」

私は紙袋の中からまんじゅうの箱を取り出し、心に向かって差し出す。

「温泉まんじゅう。お父さんが心ちゃんの好物だからって」

心はまんじゅうを受け取ると、ポケットの中から小さな紙袋を取り出した。

「おみやげ」

私はぼんやりと小さな袋を見つめる。心は私の手にその袋を握らせた。

「私に？」

「そう」

「開けてもいい？」

「どござ」

胸をドキドキさせながら袋を開ける。すると中から桜貝の色に光る、かわいらしいリングが出てきた。

「かわいい……」

思わず微笑んで、指にリングをはめる。

すると心が立ち上がり、そんな私につぶやいた。

「麻利が……海ちゃんにつて」

私はゆっくりと顔を上げる。心は私を見下したように笑っている。わざとだ。こいつわざと私を喜ばせて、おもしろがってる。

「大事にするんだな」

心は笑いながらそう言っつて、私の前を通り過ぎる。私はそんな心の背中に小さく声をかけた。

「あんた……誰なの？」

私の言葉に心が立ち止まる。

「俺は海の兄ちゃんだよ？」

心が私に振り返る。私は黙って心の着ているTシャツを見つめる。そしてその胸に小学校の名札を思い浮かべ、私のかすかな記憶がよみがえった。

「小学校2年の時、私を川に突き落としたの、あんたでしょ？」

心はふっと笑って前髪をかき上げる。

「胸の名札に書いてあった。習ったばかりのあんたの名前」

庭先からママとお父さんの笑い声が聞こえる。

効きすぎたエアコンが私の体を冷やしてゆく。

次の瞬間、心が私の前に立ち、その冷たい手を私の頬にそつと当たてた。

「そつだよ。よくわかったね？海ちゃん」

私はじつと目の前の心を見る。

私を見下ろすようなその顔は、川に落ちた私を土手から見下ろしていた、あの男の子の顔だった。

「お前を川に突き落としたのは、この俺だよ。俺はお前のことを、

ずっと憎んでいたからな」

心の言葉に私の背筋が凍りつく。私は震えながら、黙って心の冷たい瞳を見つめた。

「あら、心ちゃん、いたの？」

その時リビングのドアが開き、外の暖かい空気が流れ込んできた。

「何だこの部屋？エアコン効きすぎだぞ？」

お父さんとママが荷物を抱えて入ってくる。

私の頬に触れていた心の手が、さりげなく離れていく。

「海？」

次の瞬間、私はママの背中に駆け寄り、顔をうずめていた。ママのシャツをつかむ私の手が小さく震えている。

そんな私を見たお父さんが、心に向かってつぶやいた。

「心。お前、海ちゃんに何か言ったのか？」

「別に」

心はそう言ってドアに向かって歩き出す。するとママが震える私を抱きしめて、心の背中にこう言った。

「心ちゃん！言いたいことがあったら私に言って！」

心は背中を向けたまま立ち止まる。

「悪いのは全部私でしょ！？海は何にも悪くないのよ！」

ママの言葉に心がゆっくりと振り返る。

私はママの胸に抱かれながら、私と同じように震えているママを見上げる。

心を見つめるママの瞳からは、涙がぼろぼろとこぼれていた。

「やってらんねーよ……」

そんな私たちを見て心がつぶやく。

「お前らといまさら家族なんて、やってらんねーんだよ！」

私は呆然と心を見つめる。

心は振り返り部屋を飛び出そうとする。

しかしそんな心の腕をお父さんがつかみ、その頬を思い切りひっ

ばたいた。

「心！いいかげんにしなさい！」

あの優しいお父さんが、怖い顔で心を見る。

心は頬を押さえてお父さんをにらみつけると、小さな声でつぶやいた。

「悪いのは全部あんだら？」

私を抱きしめるママが静かに目を閉じる。

「あなたが母さんを引き止めてたら、俺はこんなことしなかったよ」

心はそう叫ぶとお父さんを突き飛ばし、玄関から外へ出て行った。

「心！」

お父さんはそう言ったまま立ち尽くす。その瞬間、ママが床に崩れるようにして泣き出した。

「ママ……」

私は震える手でママの背中をなでる。しかしママはいつまでもいつまでもその場で泣き続けていた。

17 4つのオムレツ

夕暮れの縁側に座り、私は見慣れた庭を眺めていた。

私の記憶には残っていないが、浴衣を着た小さな私が、死んだパパとここで花火をやっている写真を、アルバムで見たことがある。

その時私の後ろで、お父さんの足音が止まった。

「ママは？」

私が振り返りお父さんを見上げる。

「寝たよ。やっと落ち着いたみたい」

お父さんはそう言ってかすかに笑うと、私の隣に腰をおろした。

さっきまでの暑さが嘘のように、夕方の涼しい風が吹き込んでくる。

「海ちゃんには、ちゃんと話しておかないといけないね……」

静かな縁側にお父さんの寂しそうな声が響く。

私は何も言わずに夕暮れの庭を見つめる。

風は桜の木を揺らし、緑の葉が一枚ゆっくりと落ちてきた。

次の朝、私が眠い目をこすりながらキッチンへ行くと、ママが慣れない手つきで朝食を作っていた。

「おはよう、ママ」

「あ、海ちゃん、おはよう」

ママはフライパンを持ったまま振り返り、いつもの笑顔で私を見る。

「ねえ、今朝はママ、オムレツ作ってみたの。おいしいかどうか海ちゃん食べてみて？」

私はぼんやりとテーブルの上に並ぶ4つのオムレツを見る。

「心ちゃん……帰ってきたの？」

私の声にママの動きが止まり、やがて小さく首を横に振った。

「大丈夫よ、一晩ぐらい帰ってこなくても。男の子なんだし、もう

17になるんだし……」

ママは自分に言い聞かせるようにそう言って、無理に明るく笑う。私はそんなママの顔を見るのがつらくて、キッチンの隅にあったゴミ袋をつかむと、さりげなくママの前から離れた。

「海ちゃん……」

私の背中にママの不安そうな声が聞こえる。

「ゴミ、捨ててくるよ」

私はそうつぶやくと、サンダルをはき外へ出た。

玄関から一歩外へ出ると、朝だというのに真夏の日差しが私の顔に照りつけた。

私は目を細めて空を見上げると、ゴミ袋を持ち上げ道路へ出る。

ゴミ置き場のそばでは、近所のおばさんたちが立ち話をしていた。

「おはようございます」

「あら、おはよう、海ちゃん。朝から暑いわねえ」

おばさんたちはそう言って、私に笑いかける。

私も笑ってゴミを置いたあと、こちらに向かってくる二人の人影に気づいた。

「しん……ちゃん？」

私はつぶやき立ち尽くす。不機嫌そうな顔の心が、麻利と並んで歩いてくる。

おばさんたちはそんな二人を見て、何やら言いたげに私の前から去って行った。

「おはよう、海ちゃん」

やがて私の前にやってきた麻利が、にっこり笑いかける。

「心ちゃん昨日、私のうちに泊まったの。ごめんなさいね、連絡もしなくて……この人が絶対連絡するなっつるさくて……」

麻利はそう言って心を見る。

「今日もね、帰りたくないなんて駄々こねるから、私が無理やり連れてきたの」

「コドモ扱いすんなよ」

「だってコドモじゃない？心ちゃんは」

麻利はおかしそうに笑うと、心の背中を私のほうにそっと押した。「それじゃあ、ちゃんとご家族に引き渡しましたから」

麻利が私に向かって手を振る。

「あ、あの……」

私が生をかけようとしたが、麻利は静かに微笑んで、もと来た道を去っていった。

私と心は朝日の中で立ち尽くす。私の頭に昨日のお父さんの声がよみがえる。

『心の本当のお母さんは、海ちゃんのママなんだよ』

その時突然、心が私の手をとった。

「マジでつけてやがる……」

私は心に握られている自分の手を見つめる。その指には昨日もらった桜色のリングが、朝日を浴びて光っていた。

「バカじゃん」

心はそうつぶやくと、私から手を離しゆっくりと歩き出す。

「心ちゃん！」

そんな心の背中に私が声をかける。

「お父さんとお母さんに謝りなよ！すっごく心配してたんだからね！あんたのこと！」

心は何も答えずに、私を残して家の中へ入っていった。

18 私の知らない過去

『海ちゃんのパママとお父さんはね、高校時代からの付き合いなんだ』

私は一人キッチンのテーブルに座り、誰も手をつけていないオムレツを見つめる。

ママは食事もしないで仕事に出かけ、お父さんは原稿描き、心は帰ってくるなり自分の部屋に入り込み、出てこようとはしなかった。私はぼんやりとキッチンから縁側を見つめる。

昨日あそこで私に話した、お父さんの寂しげな顔がよみがえる。

「お父さんはママのことが好きだった。ママもきつとお父さんが好きだった。だからハタチの夏に、ママはお父さんとの子供を産んだ」
私はゆっくりと顔を上げ、お父さんを見つめる。お父さんはそんな私に小さく笑いかけて言った。

「その子供が心なんだよ」

私はぼつととする頭の中で一生懸命考える。そして思いつくままにつぶやいてみる。

「じゃあ、ママとお父さんは結婚していたの？」

「いや、ママは結婚しないで心を産んだ」

14歳の私の胸が小さく痛む。

「俺はその頃、定職にもつかないで、ただ夢を追ってマンガを描いてた。収入もなかったし、結婚なんてできるわけなかった」

お父さんは庭を眺めて寂しそうに笑う。

「それなのにママは心を産んだ……もちろんまわりからは反対されたのに……ママは心を産んだ。産みたかったんだ」

ハタチのママ……結婚しないで子供を産んだママ……今まで想像したこともなかった。

「でもママのうちは厳しくて、そんなママの行動は許されなかった。

心が1歳になる前、ママに、会社の社長をやってるお金持ちの男との、結婚話が持ち上がった」

お父さんはそう言っただけ私を見る。

「それが海ちゃんのパパだよ」

私は写真の中のパパの笑顔を思い出す。

「ママは迷ってた。でも俺はこう言った。『心は俺が育てる。だからもう俺たちのことは忘れて、そいつと結婚しろ。そのほうがお前は幸せになれる』」

「お父さん……」

私は顔を上げお父さんを見る。

「何でそんなこと言っちゃったの？お父さんはママのことが好きだったんでしょ？ママもお父さんのことが……」

そこまで言っただけとする。ママがパパと結婚したから、私が生まれただけ。

ママがパパと結婚しなかったら……そんな私の頭をお父さんの手がそっとなでる。

「それでよかったはずなんだ……ママはパパと結婚して、海ちゃんが生まれて……ママは幸せになれるはずだったんだ……」

お父さんは私の頭に手をのせ、庭を見つめ、涙を流していた。

「でもその考えは間違っていた。俺はママのことを忘れられなかったし、何より自分の息子を傷つけた……」

お父さんの涙声に私の胸が痛む。

「心はお母さんが欲しかったんだ。ママも結局は心のことが忘れられなくて……心が小学生の頃から少しずつ、三人で会うようになっていた」

そんなことがあったなんて……知らなかったのは私だけだったんだ。

「ママが再婚に踏み切れなかったのは、亡くなったパパに申し訳ないと思っただけだろう。それと海ちゃんにも……でもそれは大人の事情。海ちゃんのことを知っただけ心がよく言っただけ。『なんでもの子』」

はいつも僕のお母さんと一緒にいるの？ずるい』って……」

私の耳に心の言葉が聞こえてくる。

『お前を川に突き落としたのは、この俺だよ。俺はお前のことを、
ずっと憎んでいたからな』

心と言ったあの言葉は本当だったんだ。

「ごめんな……海ちゃん……」

お父さんが両手で顔を覆って、私に謝る。

「ごめんな……」

お父さん、どうして私に謝るの？

私はずっと幸せだった。ママがそばにいてくれたから幸せだった。

でも心は違ってたんだ……

19 1センチ先のキス

その時目の前の椅子が大きく動き、心が私の前にどかっと座った。私はぼんやりと顔を上げ心を見る。

「腹減った」

心は私にそう言って、テーブルの上のオムレツを口にする。私はそんな心に向かってポツリとつぶやく。

「それ、ママが作ったの……」

心は何も言わずにオムレツを食べ続ける。

「おいしい？」

「まずい」

私は黙って心を見つめる。まずいと言いながらも心はオムレツを平らげると、顔を上げて私のことをじっと見た。

私は思わず目をそらしたくなる気持ちをぐっと押さえて、どうしても聞きたかった一言を口に出す。

「心ちゃん……本気で私を殺したいと思ったの？」

その言葉に心は持っていたフォークを、私に突き刺すように差し向けた。

「そつだよ。お前がいなければ、母さんは俺のもんになるって思ってた」

キッチンの窓から風が吹き込み、私と心の髪をかすかに揺らす。

心はフォークで私を指したまま、冷たく笑ってこう言った。

「だから俺はお前を殺そうと考えた。学校帰りに誘い出して、川に向かって背中を押した」

心の手からフォークが落ち、空っぽの皿がからんと響く。

「バカだろ？頭悪いガキだよな？」

私は何も言わずに皿の上のフォークを見つめる。

「たとえお前が死んだって、俺を捨てた母親は戻ってくるはずがないのに……」

私の耳に心のかすれる声が聞こえる。心は乱暴に立ち上がると、私を残し歩き出した。

「心ちゃん！」

そんな心に私が叫ぶ。

「それでも結局、ママはあんたのお母さんになったんじゃない！だからホントは嬉しいんでしょ！？心ちゃんホントは嬉しいんでしょ！？」

私の言葉に心が振り返る。

「バカじゃねーの？今さらあいつらがくつつこうが別れようが、俺にはカンケーないね」

「そんなの嘘だよ！」

私は立ち上がり心のそばへ駆け寄った。

「私は嬉しいもん！お父さんができて嬉しいもん！だから心ちゃんだつてきつと……」

「俺とお前を一緒にするな！俺はお前みたいなガキじゃねーんだよ！」

心がそう言って私のことを突き飛ばす。私はテーブルにぶつかり、その拍子にグラスが床に落ちて粉々に砕けた。

「心……」

私は目に涙を浮かべて心を見つめる。心は冷たい目つきで、私のことをにらんでいる。

「心ちゃんだつて……ガキのくせに……」

次の瞬間、心が私の腕を思い切りつかんで引き寄せた。殴られる……私はとつさにそう思った。

「海ちゃん！」

バタバタと廊下を走る、お父さんの声が聞こえる。

お父さんはキッチンの床に散らばるガラスの破片を見て、心に怒鳴りつけた。

「心！お前、海ちゃんにまた何かしたのか！？」

「してないよ。何も」

心はそう言って私を見る。私はあわてて涙をこすると床のガラスを拾い始めた。

「何でもないの。私がテーブルにぶつかっただけ」

「な？そう言ってるだろ？」

心はお父さんに笑いかけると、キッチンを出て行った。

お父さんは黙ってそんな心の背中を見送った後、ガラスを拾う私に声をかける。

「大丈夫？今掃除機持って来るからね」

そう言って廊下に出て行くお父さんの足音を聞きながら、私は震える手でそつと自分の唇に触れる。

キス……されるかと思った。

心の唇は、私の1センチ先で止まった。

20 ありえないんだから！

心はママの子供だった。私も真正銘ママの子供だ。だから心と私は、半分血のつながった兄妹なのだ。

「海ちゃん！このてんぷらサイコーに美味しいね！」

お父さんが大げさに喜びながら、私の作ったてんぷらを食べる。

私は苦笑いしながら、チラリとその隣に座る心を見る。

心は箸で乱暴にてんぷらを突き刺すと、私を見てニヤリと笑った。ふざけてる！絶対この男ふざけてる！

確かに私はあんたのこと、ちよっぴりだけ気になってたけど、でもそれは私たちが赤の他人だと思っただけからで！ママの子供だっ てわかったあんたのことなんて、もう何とも思っ てないんだから！キスなんてぜーったいありえないんだからね！

その時、玄関で大きな物音が聞こえ、私は思わずキッチンを飛び出した。

「ママ！？」

するとそこには、ママが壁にもたれるようにして倒れていた。

「ママ！ママ、どうしたの！？」

私が駆け寄ると、ママは顔を上げ少し笑った。

「何でもないの。今そこでつまずいちゃって」

そこへお父さんがあわてて飛んでくる。

「どうした？大丈夫か？」

「やあねー、何でもないって言ってるのに」

ママはそう言って、笑いながら立ち上がった。

「心ちゃんは？」

「いるよ。てんぷら食べてる。朝はママの作ったオムレツ食べてた

よ」

「そう」

ママが安心したように微笑む。でも何だか今日のママはヘンだった。

「お前、顔色悪いぞ？部屋で休んだほうがいいんじゃないか？」

「大丈夫よ、お腹すいちゃった。でも先にお風呂入ってくるわね」

ママはそう言ってお風呂場へ向かう。私とお父さんは黙ってそんなママの背中を見つめる。

その時、キッチンを出てきた心が、私に向かってこう言った。

「オムレツまずかったって言うておいたか？」

私は振り返り心をにらむ。

「どうしてあんたはこういう時にそういうこと言うのよ！あんたママのこと心配じゃないの!？」

「だってつまずいただけだって本人言ってたじゃん」

「心ー」

お父さんが上目遣いで心をにらむ。

「そんなに心配なら、親父も一緒に風呂入ってやったら？」

「心！殴るぞ！」

お父さんが顔を赤くして右手を振り上げる。

心はそんなお父さんから顔を背けると、私に意味ありげに笑いかけ、自分の部屋に入って行った。

21 麻利さん

夏休みは長かった。

ママは何となく顔色が悪かったけど、仕事が詰まっているらしく、毎朝早くから会社へ出かけていく。

お父さんはそんなママを見送った後、部屋にこもってマンガを描く。

心は相変わらず、私をバカにしたような態度だけど、もう昔のこととは話さない。もちろん私にキスするふりなんてしない。

私は誰もいないキッチンで昔のアルバムをめくる。アルバムの中では幸せそうなパパとママと私が笑っている。

このころママは本当に幸せだったのだろうか……ママはパパのことを愛していたのだろうか……ママは私を産みたかったのだろうか……

私の目から涙がこぼれそうになった時、仕事部屋からお父さんがやってきた。

「あー、終わった終わった」

お父さんはぼさぼさ頭をかきながら、キッチンのいつもの席に座る。

私はアルバムを抱え立ち上がると、にっこり笑ってお父さんに言った。

「今ご飯温めるね」

お父さんは私を見て嬉しそうに笑った。

「ママ遅いね」

「今夜も残業かな」

私とお父さんはそんなことを話しながら、向かい合って夕食を食べる。

「心は？」

「部屋にいるよ。彼女と」

「麻利ちゃんか……」

お父さんの声には私は何気なく、指に光る桜色のリングを見つめた。その時心の部屋のドアが開き、二人が玄関に向かって歩いてきた。「おじやました」

麻利がキツチンへ顔を出し、お父さんに会釈する。私はぼんやりとそんな麻利の笑顔を見る。

「麻利ちゃん」

お父さんが突然麻利を呼んだ。

「たまにはうちでご飯食べて行かないかい？」

麻利は少し驚いた顔をしてお父さんを見る。

「海の作った料理はサイコーにおいしいんだよ」

「麻利！そんなヤツほつといていいから、行くぞ！」

心が怒った顔で麻利を呼ぶ。しかし麻利はにっこり笑うと、私とお父さんに向かってこう言った。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

「どうぞ、どうぞ」

お父さんは嬉しそうに麻利を椅子に勧める。

心はすねた顔でそんな様子を見つめていた。

「麻利ちゃん、心は学校でいい子にしてるかい？」

お父さんが味噌汁をすすりながら、麻利に尋ねる。

麻利は私からご飯茶碗を受け取ると、にこやかに微笑んで言った。

「いい子ですよ。お勉強もできるし、女の子にも優しいし……」

「えー？」

私が思わず声を上げると、テーブルの下で、心が私の足を蹴飛ばした。

「何か文句あるか？」

「別に」

とは言ったものの……あんた絶対、外では猫かぶってるでしょ!?

麻利は私と心を見て小さく笑う。

「それに心ちゃんは、妹さん思いよね？」

「バカ言うな。誰がこんなクソガキ」

「心」

お父さんが漬物をつまんで、心をにらむ。麻利は私の隣でくすくす笑っている。

そんな麻利の左手に、シルバーのリングが光る。

「あの……麻利さんと心ちゃんは、いつから付き合ってるの？」

「そうねえ、いつからだったかしら？」

麻利はそう言っただけ心を見る。

「さあね。忘れた」

「お前ら、小学校から一緒だもんな？」

お父さんの声に私はじつと二人を見つめる。

「でも小学校の頃の心ちゃんは意地悪だったから」

「麻利だって髪の毛みたいに短くて、まるで山ザルだったぜ？」

「もう失礼ね」

そうか……この二人、そんなに昔からの付き合いなんだ。

私の知らない心のことを、この人は何でも知っている。

「麻利ちゃん」

二人の様子をニコニコと見つめていたお父さんが、ポツリとつぶやく。

「しょうもない息子だけど、これからもよろしく」

麻利はにっこり微笑んで、お父さんにうなずく。心は怒った顔で立ち上がると、麻利に向かって言った。

「食ったら帰るぞ！」

「うん」

「もっとゆっくりしていけばいいのに」

「いえ、もう遅いので。ごちそうさまでした」

麻利はぺこりと頭を下げると、心の後について部屋を出て行った。

私はぼんやりと二人の後ろ姿を見つめる。お父さんはそんな私に笑いかけて言った。

「あの子、心にはもったいないほどいい子だろ？」

「そうだね」

私はつぶやき、ふと麻利の椅子に置いてある帽子を見つけた。

「あ、忘れ物」

「まだそのへんにいるだろう」

「私持つてく」

私はそう言っつて、キッチンを飛び出した。

22 考えたことあるの!?

玄関のドアを開けると、今にも雨の降り出しそうな生暖かい風が、私の頬に吹き付けた。

私は目を細めて、庭先に立つ二人の影を見つめる。

二人は緑の葉の生い茂る、パパの大好きだった桜の木の下で、抱き合ってキスをしていた。

私は麻利の帽子を握りしめ、ただその場に立ち尽くす。

やがて二人はゆっくりと離れ、玄関先につつ立っている、私の姿に気がついた。

「やだ……海ちゃんに、見られちゃった?」

麻利はそう言っただけで恥ずかしそうに笑う。

「もう行けよ。バス来るぞ」

「うん。それじゃ」

心の声に麻利が手を振り庭を出て行く。

「あ、麻利さん!これ!」

私があわてて帽子を振ると、麻利は振り返ってにっこり笑った。

「ありがとう」

私は麻利の唇を見つめ、この間、私に触れそうになった心の唇を思い出す。

麻利はそんな私を残し庭を出て行った。

「送ってあげないの?」

私がつぶやく。心はチラリと私を見て言った。

「いいんだよ。今日は一人で帰るって」

「ふーん」

私はそう言っただけで心を見る。心は私から目をそらすと、黙って桜の木を見上げた。

風はだんだんと激しくなり、緑の木の葉を大きく揺さぶる。

そんな木を見つめる心の横顔に、なぜか胸が痛くなった。

「心ちゃん」

私の声が風にかき消されそうになる。

「この前なんであんなこと……」

「俺にキスされると思ったんだろ？」

心が振り返って私を見る。

「あせってやんの。誰がお前みたいなガキにキスするか」

私は黙って心を見つめる。心はそんな私のことをバカにするように笑う。

「心ちゃんはコドモだね？」

「何？」

強い風が私の髪をなびかせ、空からポツリと雨が落ちる。

「そうやって大人ぶっているけど、中身は全然コドモだね？」

心が私をにらみつける。

私はその目をそらさずに、思いきって口に出す。

「いつだって一人で被害者ぶっちゃって……お父さんとママがどれだけあんなこと大事に想ってるのか、考えたことあるの!？」

空からの雨が顔に当たり、いつの間にかあふれた涙と一緒に、私の頬を流れ落ちる。

「それがわからないあんたは子供と同じだよ！」

心はじつと私を見つめて、やがて低い声でつぶやいた。

「偉そうに言うな」

私は涙を流しながら唇をかみしめる。

「お前なんか俺の何がわかるんだよ？」

その時玄関のドアが開き、お父さんが飛び出してきた。

「心！海ちゃん！お母さんが倒れて救急車で運ばれた！」

「え？」

私は驚いてお父さんを見る。心もゆつくりと顔を上げた。

「俺はこれから病院へ行くから！お前らも来るか!？」

「私も行く!！」

お父さんの後について、ガレージへ駆け出す。

「心は!?!」

「俺は……行かない」

私は立ち止まり心を見る。心は私と目を合わせないように顔を背けている。

「海!行くぞ!」

お父さんの声を聞き、私は心を残し車に乗った。

23 ママの大事な子供たち

「ママ！大丈夫！」

私が病室へ駆け込むと、ママはベッドに横になったまま、ほんの少し笑った。

「ママ……」

私は思わず涙を流し、ママの手を握りしめる。

「大丈夫よ。心配しないでよ」

そばにいた看護師さんが、そんな私に優しく微笑む。お父さんもママの顔を見ると、安心したようにため息をついた。

やがて担当の医師がやってきて、お父さんに説明をする。

「過労ですね。2、3日安静にしてればよくなります。ただ、奥さんの場合、おめでたのようです……」

「は!?!」

お父さんは啞然として口を開ける。私はゆっくりと顔を上げママを見る。

「おめでたです。今7週目に入ったところです」

「ホントですか!?!」

お父さんが嬉しそうに声を上げる。しかしママは困った顔をして目を閉じた。

「ママ？ママは気づいてたの？」

私の声にママがうなずく。

「どうしてそんな大事なことを隠してたんだ？」

「言えるわけじゃない……」

ママがそう言ってお父さんを見る。

そしてそつとお腹をなでると、泣きそうな声でつぶやいた。

「この子を産んだら、心ちゃんが傷つくわ」

私は黙ってママを見つめる。

「私は心ちゃんを育ててあげられなかったのに、この子を育てたら、

また心ちゃん傷つくわ」

「そんなことないよ」

お父さんがなだめるように言う。

「だってあの子、海のことだって恨んでたでしょ？きつとお腹の子のことよ……」

「大丈夫だよ」

しかしママは顔を覆って泣き出した。

「ママ……」

私はそんなママの背中をそつとさする。

「ママは、その子を産みたいんだよね？」

私の声がママの泣き声と一緒に響く。

「ママは、心ちゃんを産みたかったんだよね？」

お父さんが私のことをじっと見ている。

「ママは……私を……産みたかったんだよね？」

私の声がいつの間にか涙声になる。ママは顔を上げると、泣きながら私をぎゅっと抱きしめた。

「当たり前じゃない……あんたたちみんな、私の大事な子供なのよ」

私はママの胸に顔をうずめて、子供のように泣きじゃくった。私を抱くママの手が、何だかとても気持ちよかった。

「ホントに一人で大丈夫？」

病院の前に止まったタクシーに乗り込む私に、お父さんが心配そうにつぶやく。

「大丈夫だよ。それよりお父さんは今夜一晩、ママについててあげて」

「わかった……」

お父さんがうなずき、タクシーのドアが閉まる。私はにっこり笑って、雨の中に立つお父さんに手を振る。

そしてゆっくりと走り出したタクシーの中で、ぼんやりと心のことを考えていた。

24 きつと誰かのために

タクシーが家の前に止まると、私は手で雨をよけながら、庭から玄関へ走りこんだ。

その時、縁側の窓からぼんやりと外を見ている、心の姿に気がついた。

「心ちゃん……」

家に入って、まっすぐ心のもとに向かう。心は閉め切った窓から、雨の降りしきる庭先を見つめていた。

「ママ……どうだった？」

やがて心がポツリとつぶやく。

「心ちゃん、ママのこと心配してるんだ？」

「うるさい。質問に答えろ」

私はふつと笑って心に言う。

「ママ、おめでたなんだって。今2ヶ月」

心がゆっくりと振り返り私を見る。私もそんな心の顔をじつと見つめた。

雨の音は次第に激しくなり、風と一緒に窓を揺らす。私たちはそんな嵐の中、何も言わずにじつと見つめ合っていた。

「残念だね、心ちゃん。またママを独り占めできなくて」

やがてつぶやいた私の声に、心が黙ってにらみつける。私は心を見ながら、小さく笑う。

「それともその子を殺す？簡単でしょ？お腹の子供を殺すくらい」

「お前……」

心は私をにらんだまま、押し殺すような声でつぶやいた。

「殺されたいか？マジで」

「やってみなよ？あの時、私を川に突き落としたみたいに」

その瞬間、心が私の胸元を乱暴につかみガラス窓に叩きつけた。

私は窓の向こう側の、激しい雨の音を聞きながら叫ぶ。

「できるわけない！心ちゃんにそんなこと、できるわけない！」
「うるせー！黙れ！」

心の怒鳴り声とともに、その手が私の首をつかんだ。思わず固く目を閉じた時、私の体が温かいものにふんわりと包まれた。

「心……」

心の両手が私の体を抱きしめている。だけど、その手もその肩も小さく震えていた。

「何で俺なんか産んだんだよ……誰にも歓迎されないのに……何のために産んだんだよ……」

私は心の消えそうな声を聞きながら、そつと背中に触れる。

「わかるよ……私はあんたの気持ちながら、そつと背中が誰よりもわかる」

お父さんが好きだったママ。でもパパと結婚したママ。そして生まれた私……

「私だつて思ったもん……私はこの世に生まれてきてよかったのかつて……私だつて思ったもん……」

私は心の背中を抱きしめる。泣きたくないのに、涙がぼろぼろこぼれてくる。

「でもきつとよかったんだよ……私も心も……きつと生まれてきてよかったんだよ……」

外から吹き付ける雨と風が、窓をガタガタと揺らす。

心は何も言わずに、私を抱きしめたまま肩を震わせている。私は目を閉じ、ささやくようにつぶやいた。

「私たちはきつと、誰かのために生まれたきたんだよ……」

そう、きつと私は、心ちゃんのために生まれてきたんだ。

態度がでかくて口が悪くて、私のことをすぐ子供扱いして……でもほんの少し優しくして、ものすごく寂しがりやの、『お兄ちゃん』のこころを温めてあげるために。

……なんて言ったら怒るよね？……心ちゃん。

25 遠い記憶

次の日は快晴だった。私は何度もしつこく鳴り響くチャイムの音で目が覚めた。

昨日はなかなか眠れずに、うとうとしだしたのは確か明け方だった。時計の針はもう10時を回っている。

もう一度鳴ったチャイムの音に、私は眠い目をこすりながら、玄関へ向かった。

「こんにちは。心ちゃんいる？」

玄関を開けると、そこには麻利が立っていた。

「あ、たぶん、部屋に……」

私は急に自分のパジャマ姿が恥ずかしくなって、思わずうつむき足元を見る。

しかしいつも玄関に脱ぎ捨てられている心の靴が、そこには見当たらなかった。

「昨日の夜から携帯に電話してるんだけど、全然でないからちょっと気になって……」

麻利の言葉に私はあわてて心の部屋のドアを開ける。しかしそこに心の姿はなかった。

「どうしよう……心ちゃんがない……」

「海ちゃん？」

麻利が心配そうに私を見る。

「どうしよう……心ちゃんがなくなっちゃった……」

私は急に不安になっていつの間にか泣き出していた。

「うん、ここには来てないけど……でも大丈夫だよ。こっちに来たらすぐ連絡するから」

ママの病院にいるお父さんが、携帯電話で私に話す。

「うん……」

「そんなに心配しないで。ね？海ちゃん」

お父さんは明るくそう言って電話を切った。

私は受話器を置いて、キッチンテーブルに座っている麻利を見る。

「心ちゃん、いなかった？」

「うん」

私がつつむいて椅子に座ると、麻利がにっこり微笑んだ。

「だいじょうぶよ。心ちゃんの放浪癖は今に始まったことじゃないから」

私はゆつくりと顔を上げる。麻利はいたずらっぽく笑いながら、私に言った。

「あの子、昔からそうなのよ。嫌なことがあるとすぐ家飛び出しちゃう。コドモでしょ？」

私は黙ってそんな麻利の顔を見つめる。麻利は私から目をそらすと、窓の外を眺めながらつぶやいた。

「でもいつもは、私のところに来るのにな……」

麻利の横顔は笑顔だったが、どことなく寂しそうだった。私は麻利に向かって思い切って口を開く。

「麻利さんは、小学校の頃から、心ちゃんのこと知ってるんだよね？」

私の言葉に麻利が振り返り、うなずく。

「そうよ」

「じゃあ心ちゃん、小学校の時、私のこと何か言ってた？」

「え？海ちゃんのこと？」

麻利が不思議そうに私を見る。私は両手を握り締めると、テーブルに身を乗り出すようにして言った。

「心ちゃん、私のこと恨んでたの。私のこと殺そうと思ってたの」

「やだ、嘘でしょ？」

おかしそうに麻利が笑う。

「心ちゃんにそんなことできるわけない……」

麻利はそう言った後、何かを思い出したように窓の外を見た。

「でも、そういえば……」

麻利の言葉に、私が息をのむ。

「私、心ちゃんがこの家に来たことあるかも」

「え……」

「そうだわ……すっかり忘れてたけど……私ここに来たことある」

「心ちゃんが……ここに？」

麻利は庭に生い茂る桜の木を見つめたあと、私に振り返って言った。

26 笑顔と涙と桜色のリング

「確か4年生ぐらいの時、心ちゃんが私に言ったの。女の子に謝りたいから、一緒に来てくれって」

私は自分を川に突き落とした、男の子の顔を思い浮かべる。

「私きつと、女の子に意地悪でもして泣かせたんだと思って、おもしろそうだからついて行ったの」

麻利は記憶を呼び戻しながら、ゆっくりと話す。

「そしたら心ちゃん、どんだんだん隣町まで歩いてきて、そしてこの家の前までやってきた」

麻利がそう言ってもう一度桜の木を見る。

そういえば心と初めて会った日、心は確かこう言った。

『変わってねえな……この桜の木』……

「全然知らない道だったし、今ではすっかり街並みも変わっちゃってるから忘れてたけど……私と心ちゃんは、あの垣根からこの庭を覗いたのよ」

「それで？」

私の胸がドキドキと高鳴る。麻利は私の顔を見つめてつぶやいた。

「女の子が縁側で、楽しそうに笑ってるのが見えた。お母さんと一緒に……」

私はあの頃のかすかな記憶を呼び戻す。

私が川に落ちた時、誰かが私を押しとまわりの大人が騒いでいた。でもママはそのことについて何も触れなかった。

ママはただ私を抱きしめて「大丈夫よ」と何度も言った。だから私はその男の子のことを恨んだりはしなかった。

ママは私を押しとめたあの男の子が心ちゃんだったと、きつとわかっていたんだ。

「私たち、しばらくそんな二人を見つめていたんだけど、いつまでたっても心ちゃん何も言わないの。だから私、早く謝ってきなよ」

て、隣の心ちゃんをつついたの。そしたら……」

麻利がじつと私を見る。

「心ちゃん、泣いてた。すごく、悲しそうに……」

その言葉に私の目から、また涙があふれだした。

幸せそうにママと笑っていた私。それを見て泣いていた心ちゃん。私の胸が締め付けられるように痛い。

「その日はそのまま帰って、それから心ちゃんはその子のこと何も言わなかった。だから私も忘れてた」

麻利は泣いている私の頭を優しくなでる。

「でもあの女の子が、海ちゃんだったのね」

私はいつの間にか麻利の前で泣きじゃくっていた。

「それじゃあ、心ちゃんが私のところに来たら、すぐここに連れてくるから」

玄関先で麻利が私に笑いかける。

「すみません……」

「ホントにしようがないお兄さんね」

麻利はそう言いながら、さりげなく髪をかきあげた。

私はそんな麻利の左手に光るリングを見つめ、自分の指を差し出す。

「あの、これ、海のおみやげ……どうもありがとう」

麻利は私の指の桜色のリングを、不思議そうに見つめる。

「麻利さんから、私にとって……」

「私、こんなの買ってないわよ？」

私は顔を上げ麻利を見る。麻利はいたずらっぽく笑って、私に言った。

「きつと心ちゃんが買ったのよ。私のせいにして……ホント素直じゃないんだから」

麻利はそう言うと、私に微笑みかけて玄関を出て行った。

私は呆然と立ち尽くし、自分の指を見つめる。

心にもらったリングが、眩しい太陽に照らされて、真夏の海を思い出させた。

27 お前が決める

「心、帰ってきた？」

夕方、病院から戻ったお父さんが私に言う。

「ううん、まだ……」

私が首を横に振ると、お父さんはため息をつきながら、玄関に座った。

「まったく、しょうがないバカ息子だな」

お父さんはそう言って靴を脱ぐ。私は思わずそんなお父さんの背中に抱きついた。

「海ちゃん？どうしたの？」

お父さんがあわてた様子で振り返る。私はお父さんの背中に顔をうずめてつぶやいた。

「心ちゃん……帰ってくるよね？」

するとお父さんはにっこり笑って、私のことを抱きしめてくれた。「当たり前だろ？あいつの帰るところは、ここしかないんだから」

私は小さくうなずき、お父さんの胸で目を閉じる。お父さんはそんな私の背中をポンポンと叩いた。

そしてお父さんの言うとおり、心はその日の夜、ひよっこり私たちの前に帰ってきた。

「腹減った。俺のメシは？」

私とお父さんが食事をしているテーブルに、心が何食わぬ顔で腰掛ける。

「心……どこ行ってたんだ？」

お父さんが怒鳴りたい気持ちを抑えて、低い声でつぶやく。

「どこって……学校。英語の補習」

心はそう言って、制服のネクタイをぴらぴらさせる。

「言っただけだったっけ？」

私は呆然と心の顔を見つめる。心はそんな私を見て小さく笑った。「心ちゃん！」

「ご飯をよそった茶碗を心の前に乱暴に置くと、私は思わず叫んだ。すっごく心配したんだからね！私も、お父さんも……麻利さんも！」

心は何も言わずに茶碗を持つと、私を無視して食べ始めた。

「心ちゃん！」

「うるせえな、メシの時ぐらい静かにしろ！」

何よ、何なのよ！？昨日はめそめそ泣いてたくせに！私の前で泣いてたくせに！

私は言い返したい言葉を飲み込み、両手を握り締める。その時お父さんが、静かにつぶやいた。

「心。お母さんに子供ができた」

心は味噌汁をすすつてから答える。

「知ってる。海に聞いた」

「お母さんは迷ってる。子供を産むか産まないか。だからお前に決めてほしい」

お父さんの言葉に心が顔を上げる。私も呆然と二人を見つめた。

「何言ってるの？何で俺がそんなこと……」

「お母さんが言ったんだ。心が決まってる」

「はあ！？何でそんな大事なことが俺が決めるんだよ！？」

心がそう言つて箸をテーブルに叩きつける。

「いいから決める！産むのか！？墮ろすのか！？」

お父さんが怒った顔で心に怒鳴る。私は黙つて心の答えを待つ。

心は唇をかみしめてうつむいていたが、やがて小さな声でつぶやいた。

「そんなの……決まってるんだろ？」

お父さんがじつと心を見つめる。

「俺はそんな鬼じゃねえよ」

私は嬉しくなって、思わず心に笑いかける。お父さんも笑つて心

の頭をぐしゃぐしゃなでた。

「ああもう、うざい！」

心がすねた顔で立ち上がる。私はそんな心に自分の手を差し出した。

「そっだよね？私のお兄ちゃんには鬼じゃないよね？」

私の指に、桜色のリングが光る。心は私のことをにらみつけると、黙ってキッチンを出て行った。

「心ちゃん、照れてる」

「ああ、照れてる」

私とお父さんの笑い声を聞き、心が廊下の隅から怒鳴りつける。

「うるせー！お前らあとで覚えてろよ！」

そんな声を聞いて、私とお父さんは声を上げて笑った。

28 憧れの人

やがて季節は移り変わり、また庭の桜が満開になった頃、私は心と同じ制服の高校生になった。

「なあ、宇和野さんの父ちゃんて『うわの空』なんだって？」

新しい教室で、クラスの男子が話しかけてくる。

「うん。そうだよ」

私は笑ってそう答える。

「へえー、すげーじゃん」

「ねえ、誰なの？『うわの空』って」

「えー？お前ら知らねーの？」

いつの間にか私のまわりに、男子も女子も集まってくる。

「ちよつとエッチなマンガ描いてる人だよ。有名人だぜ？」

私はちよつぱり照れながら、女の子たちに言う。

「有名かどうかはわからないけど……よかつたら今度見せてあげようか？」

「キヤー、見たい見たい」

「私も貸してー」

「あはは、順番にねー」

私がそう言って笑った時、一人の男子生徒が私に言った。

「実は俺さ、うわのセンチのファンなんだ」

私は振り返りその子を見る。確かK中から来た、『石野くん』だったかな？

「ふーん、そうなの？」

「なあ宇和野ー、センチのサインとかもらえるかなあ？」

「いいよ、今度もらってきてあげる」

「マジ？ウソ、やったー！」

『石野くん』はそう言って嬉しそうにはしゃいでいる。その笑顔

が何だか子供みたいにかわいくて、私は思わず微笑んでしまった。

その日の昼休み、廊下に出ると、クラスの友達が私に言った。

「ねえ、石野くんて、海ちゃんのこと好きみたいだよ？」

「えー？」

私は驚いて声を上げる。

「だってこの前聞いてきたもん。宇和野さんて彼氏いるのかって」「うそぉ」

私の顔はたぶん赤くなつてたと思う。だって『好きみたい』なんて言われたの、初めてだったから。

「どうする？コクられちゃったら？」

「まさか、そんなことないって」

「あるよー、付き合っちゃえばー？」

その時廊下の向こうから、私を呼ぶ聞きなれた声があった。

「海ちゃん！」

私が顔を上げると、3年生の教室の前で麻利が手を振っていた。

そしてその隣には不機嫌顔の心の姿が……

「今日お母さんと赤ちゃん、退院するんだってね？」

麻利がそう言っただけ私に笑いかける。

「そうなの。早く帰ってベビーベット用意しないと」

「いいなー、今度私にも赤ちゃん抱かせてね？」

麻利の言葉に私はうなずき、チラリとその隣の心を見る。

「心ちゃんも。忙しいんだから、早く帰ってきてよね！？」

「うるせえなあ……」

心はそう言っただけ私をにらむ。

「何か機嫌悪いのよね、この人。赤ちゃんが来るからすねてるのかしら？」

麻利が笑いながら、心の顔を覗き込む。

「バーカ、そんなんじゃない。早く図書室行こうぜ」

心はそう言っただけ、持っていた本で麻利の頭をポンと叩き、ゆっくり

りと歩き出した。

「それじゃ、またね」

麻利は私に手を振り、心の後を追いかける。麻利の左手には、まだあのシルバーのリングが光っていた。

「へえー、あの人が海ちゃんのお兄さんの彼女？」

友達の声に私が答える。

「そっだよ」

「きれいな人だねー」

私はにつこり笑って麻利の背中を見つめる。

「うん。私の憧れの人なんだ」

やがて麻利は心に追いつき、さりげなく隣に並ぶ。そんな麻利の細い手を、心がそっと握りしめた。

きつと麻利さんも、心ちゃんのために生まれてきたんだ。そして心ちゃんも麻利さんのために生まれてきた。

私は二人の背中を見送りながら、ふとそんなことを考える。すると何だか胸の中がほかほかと温かくなってきた。

校庭では桜の花びらがふんわりと舞い落ち、春の柔らかな日差しが、長い廊下に差し込んでいた。

29 優しいお兄さん？

「ねえ、心ちゃん。マンガ読んでないで手伝ってよ。早くしないとママたち帰ってきちゃう」

リビングでベビーベットを組み立てながら、私が心に声をかける。「そんなん、今頃作ってるお前がとるいんだ」

心はいつものようにソファーに寝転がり、雑誌をめくる。

「だって心ちゃんもお父さんも、なかなか手伝ってくれないんだもん」

「俺は忙しいの」

「どこが」

「勉強でもしてくるか。明日テストあんだよな」

心はそう言って雑誌を投げ捨てると、立ち上がり歩き出した。

「ちょっとー、ホントに手伝ってくれないの!？」

私がつがりつくような顔を作って心を見上げる。心はじっと私の顔を見つめた後、何も言わずにリビングを出て行った。

あーあ、もういいよ、わかってる。私のお兄さんはケチで、口が悪くて、全然優しくくない。『私のことを思いやってくれる優しいお兄さん』は、やっぱりこの世にいないんだ。

私はしんと静まり返る部屋の中、慣れない手つきでベットを組むだけど、何回やってもネジがうまくはまらない。

「あー、もう!」

私がいらいらしてネジを放り投げた時、心がいつの間にかリビングのドアのところ立っていた。

「そんなドライバー使ったら、夜が明けたってできないぜ?」

心はいつのまにか持ってきた、サイズの違うドライバーを使って、私の前でネジを回す。

すると、さっきまで何をやってたのかと思うほど、あっけなくネジがはまった。

「うわ、すごい……」

「すごくない。お前がバカなだけだ」

「バカバカ言わないでよ！」

私が怒った顔で心をにらむ。すると心は、そんな私を見ておかしそうに笑った。

29 優しいお兄さん？（後書き）

ここまで読んでくださった皆さま、いつもありがとうございます。
このお話も、次回で最終話となります。

長い間読んでいただき、ありがとうございました。

あとほんの少し、お付き合いいただければ嬉しいです。

どうぞよろしくお願いいたします。

30 桜の舞い散るこの庭で

「心！海ちゃん！ただいまー」

「あ、お父さん」

その時、車から降りてきたお父さんが、満面の笑顔で庭先から手を振った。そしてその後ろには、生まれたばかりの私の妹を抱くママの姿。

「ママ、お帰り！」

私は縁側から庭へ飛び降り、妹の顔を覗き込む。すると妹は、私と握手でもするかのように、小さな手を差しのべた。

「キヤー、かわいー！見て見て握手してるよー」

「桜ちゃん、お姉ちゃんに会えて嬉しいのね」

ママがそう言うてにっこり笑う。

「桜ちゃん？名前決まったの？」

「そう、桜ちゃん。いい名前だろ？」

お父さんがそう言うて、自慢げに私を見る。

「どうせ、ボケーッと庭眺めてて、桜の花見て思いついたんだろ？」
心がいつの間にか外へ出てきて、バカにしたように笑う。

「単純な名前」

「心！お前、俺が三日三晩寝ないで考えた名前をけなす気か！？」

お父さんの声にママが笑う。私はそんなママの顔を見ながら考える。

私の名前はママがつけてくれたんだよね。ママは海が好きだから……もしかしてパパとじゃなく、『空くん』と行った海を思い出してつけたのかな……私はふとそんなことを思う。そして新たな疑問が私の頭にわいてくる。

「ねえ……心ちゃんの名前は、誰がつけたの？」

私の言葉に心がゆっくりと顔を上げる。そんな心の顔を見ながら、ママがにっこり微笑んで答えた。

「ママがつけたのよ。こころの優しい男の子になりますようにって……」
ママはそう言ってお父さんを見つめる。お父さんもママを見て静かに笑った。

「それじゃあ、ママの願いは叶わなかったわけだ」

私はそう言いながら、ママの手から桜を抱き上げる。

「海！それどういう意味だよ!？」

「ほーら、桜ちゃんー、怖いお兄ちゃんですなー」

「お前な……」

すねた顔の心の前に私が桜を差し出すと、桜は小さな手をギュッと握って、ひくひくと泣き出した。

「あ、心ちゃんの顔見て泣いた」

「バーカ、お前の抱き方が下手クソなんだよ!」

心はそう言つと、さりげなく私の手から桜を奪う。そして小さく揺らしながら、愛しそくに桜を見つめた。

「ほらな？泣き止んだだろ？」

「う、うん……」

私はぼんやりとそんな心の横顔を見る。何だかいつもより、心の顔が優しく見える。

「心ちゃん……いいパパになるかもね？」

「うるさい。それより先に、お前いいかげん男作れ」

「ご心配なく。私のことを好きだって言ってくれる男の子、いるんだもんね」

「へえー、そりゃあ物好きなのやつがいたもんだな」

そんな私たちを見てママとお父さんが笑う。

「何だ、お前ら仲いいじゃん？」

お父さんの言葉に心が言い返す。

「どこが。俺はもう海のめんどろみるのは、うんざりだね」

心はそう言つて、私の腕に桜を渡す。

「ベビーベット作つといたからな!」

私はリビングを覗き込み、いつの間にか出来上がっている桜のベ
ットを見つめる。

心は縁側から部屋に上がり、機嫌悪そうに歩き出した。

「心ちゃん!」

そんな心の背中にママが言う。

「ありがとう!」

心は立ち止まると、ゆっくりと振り返りママを見た。ママは桜を
見る目と同じ目で、心のことを愛しそうに見つめている。

「お兄ちゃん!大好き!」

私は桜を抱き上げ、小さな手を心に向かって揺らしながら、そう
言った。

「バカか……お前は」

心は私を見て照れくさそうに笑うと、ドアの向こうに消えていっ
た。

「心ちゃん、照れてたね?」

「そうね」

「わかりやすいヤツ」

私とママとお父さんは、顔を見合わせて笑い出す。

そんな笑い声中、桜は幸せそうに小さなあくびを一つする。私
はそんな桜を見つめてつぶやいた。

「桜も、心ちゃんのために、生まれてきたのかな……」

顔を上げると、パパの大好きだった桜の木が、今年も花を咲かせ
ている。

パパは天国から、私たちのことをどんなふうに見つめているのだ
ろう。

パパ……私はパパとママの子供で幸せだったよ。幸せだったから、
私は今、こうやってここで笑っていられる。

やわらかな春の風が吹き、私たちの上から桜の花びらが舞い落ち
る。私は静かに微笑んで、桜の小さな手をそっと握った。

30 桜の舞い散るこの庭で（後書き）

これでこのお話は終わりです。

いつも読んでくださった皆様、感想をくださった方、評価、お気に入り登録をしてくださった方、本当に本当にありがとうございます。

今後はしばらく休止していた、もうひとつの連載ものを、ぼちぼち更新していけたらと思っています。お暇がありましたら、またのぞいてやってください。

それでは…最後までお読みいただき、どうもありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7470i/>

桜の舞い散るこの庭で

2010年10月8日12時43分発行